

「特集」 「アザリア記念会」

巻頭特別インタビュー

保阪嘉内長男

保阪 善三氏

「わたしが一番父嘉内に似ていると言われるんですが、嘉内が私に似ているんですよ……だって私はもう83歳で、嘉内は41歳で亡くなったんですから……」

今月はアザリア記念会の顧問でもあり嘉内の長男で、現在も藤井町駒井の嘉内の生家にお住まいの保阪善三さんにお話をうかがいました。

東京での生活の記憶は？

東京も4か所くらい移って最後は雑司が谷に住んでいました。

ただ、発明家の山内さんのアミノ酸醬油工場のたたずまいはよく覚えていますが、そこに自分の姿は出てきません。でも注文があるとかガラスの

一升瓶をかかえて配達に弟と一緒に行きました。今みだいにふたがきちんとできないし、転ぶと割れちゃ

うからね。その町の風景はおぼろげながら覚えているんですが、その前のところは記憶がないですね。

5年生の夏休み明けに帰ってきて藤井小学校に入りました。10歳の秋です。そして、その冬の2月には父嘉内が亡くなりました。

お父さん（嘉内）との思い出は？

父のことは、あんまり覚えていないんですよ。父が勤めた日本青年協会の近くに武蔵野女子園があつて修学旅行が遠足について行つたときの記念写真が残っています。弟妹はまだ小さかったので子ども代表つてことで私を一生懸命つれて歩いてくれたようです。写真の関係は今、すべて弟のところにあるのですが、その中には、家族で出かけたお花見や川遊びのときの写真もあります。

いろいろな方が嘉内との思い出を聞いてきますが「ほとんど覚えていない」というと「どうしてですか」なんて言います。じゃああなたはどうかと聞くと「さあ……」。

ひとつだけ、よく覚えていたのがやつぱり家族で鎌倉の鶴岡八幡宮に行ったとき、

本殿の高いところにはとが止まっているのを見て一番下の妹が「はとさん はとさん 危ないよ ガタンというから危ないよ」と、とつさに口ずさんだのを嘉内がえらく褒めて……それはよく覚えていますね。そのとき嘉内がどんな顔をしていたかとかその声とかは分からないし、妹に言っても覚えていないと言いますから、10歳前後の記憶なんてそんなものなんですよ。あとは弟といつしよに賢治さんの童話（「グスコブドリとか」）を読んでもらったような、そうでないような……。小学校2年生の九九を覚えるころ、胸を病んで肋膜炎になったことがあつて、そのとき嘉内が本を読んでもくれたというような話を、これはお袋から聞いたのかなあ。

お母さん（さかき）について

山梨市の岩手の出身、やはり実家は大きな農家でした。甲府高女（現甲府西校）に、親戚に下宿して通っていたということなので、山梨日日新聞社に務めていた1年ちよつとの間に歌壇に投稿して歌会とかそのころに出会ったのかなあと思います。

87歳まで生きていて平成3年に亡くなりましたが、母が嘉内について話すこともあまり無かつたですね。ただ、あまり酒を飲むと嘉内さんみたいに胃がんになつて死んでしまつたと言われました。

あと、子どもの頃、そう中学くらいまでは、いたずらしたときなど親父の代わり

先祖代々について行く名前が「善蔵」というのですが、私が1月3日生まれだったので蔵を三という字に変えて、長男ですが三という字がついています。これは祖父がつけたのだと思います。嘉内という名については、沖繩の「ニライカナイ」からなんていう人もあるようですが、やはり4代くらい前の先祖に「嘉蔵」という名があ

善三さんと嘉内の名前について

だと言って、昔の竹の物差しでよくたたかれました。それも平らなほうでなくて、こぼ（角）になつていくところをたたくから、痛かったなあ。

東京から帰ってきたから、革靴や服装やなんかやで、こっちはまだゴム靴（長靴の上を切ったような靴）が一般的だったから、今で言ういいめられた、というか喧嘩を吹っかけられては受けてたつて反対に殴つてしまいい相手の親にねつこんでこられたり…まあガキ大将だったね。

喧嘩も弱くはなかったし…今では気が弱いけど（笑）

その当時、作地校長先生（今の北東小学校の作地校長先生のお祖父さん）が「善太と三平」という坪田譲二の童話の主人公に私と弟が似ていると言つて、「この童話の二人のように、いい子になるように」と、私たちの親父が亡くなった後で慰めるような気持ちだったのか、そう言われたことはよく覚えています。父が亡くなつてすぐ、母も山日新聞社に勤めに出て、留守がちだったしね。

父の軍服はいくつも残っていましたが、私が着てしまいましたから・軍隊マントを着て歩いていたら軍人さんに敬礼されてびっくりしたこともありましたね。勲章や軍人会のバッジと、あと「鼻めがね」がありますよ。

近眼で目が悪かったので、兵隊で馬に乗るときなどに本人が掛けた携帯用のめがねです。便利なので、私も手提げに入れて持ち歩いて使っていました。

これだけが残っているものです。後は、私の体と父譲りの美貌が残っているだけです。（笑）

嘉内の遺品（思い出の品）は何か残っていますか？

りますので、私はその関係じゃあないかと思ひますね。嘉内という名が突然出たわけではありませぬ。



一番私が似ているつていつから「馬鹿言っちゃいけない、嘉内さんが似ているんだよつて、俺の年の半分で死んでいるんだから」つて言うんです。

私はもう83歳で、嘉内は41歳で亡くなつてますからそうでしょう。

（善三さんは無理なお願いを聞いてくれて、実際に鼻めがねをかけてくださいました。めがねをかけて遠くを見ている善三さんは確かに写真に残る嘉内に良く似ているようです。）



ケースの中側には直筆でコマイ保阪嘉内と書いてありました。その反対側には善三さんの名が…。

アザリア記念会の活動について

たまたま宮沢賢治さんとの繋がりがあつたことが幸いして、嘉内の足跡についてもこのように活動の輪が広がって来ました。親孝行の始まりというか終わりというかが出来てよかつたと思います。

——善三さんは気さくな優しい方で、終始なごやかに、笑顔でお話していただきました。ありがとうございました。——



アザリアの友たちを 紹介した書籍・映像など

「宮沢賢治 友への手紙」

筑摩書房 1968
保阪庸夫・小沢俊郎編



「宮沢賢治の青春」(写真左端)

ただ一人の友保阪嘉内をめぐって
宝島社 1994 菅原千恵子著



ビデオ(写真右)

「わが心の銀河鉄道 宮沢賢治物語」

監督・大森一樹 主演・緒方直人

アニメーションビデオ(写真左)

「イーハトーブ幻想 KENJIの春」

監督・河森正治 主演・佐野史郎



「心友 宮沢賢治と保阪嘉内」
―花園農村の理想をかかげて―
山梨ふるさと文庫 2007
賢治・嘉内生誕110周年記念会
大明 敦 編 著

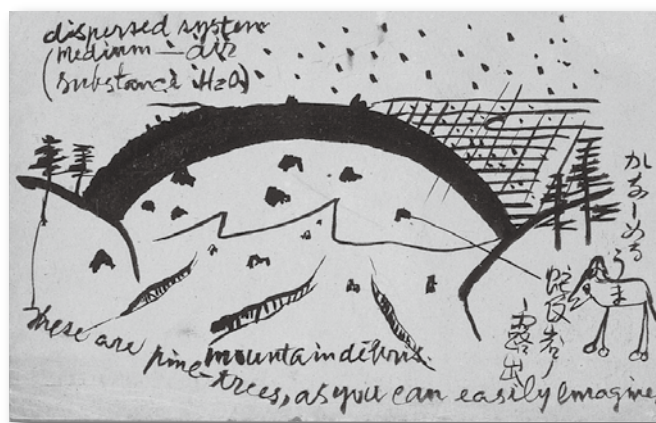


宮沢賢治に関する書籍は、これ以外にも多数出版されています。ここに紹介した書籍・ビデオはアザリア記念会が所有しているものです。書籍の一部は、市立図書館に収蔵していますので、お問い合わせください。

賢治からの手紙



駒井の生家に残る嘉内の蔵書(啄木歌集)には「啄木歌集一巻は私にどれほどいろいろ考へさせたか知れない」と記してありました。

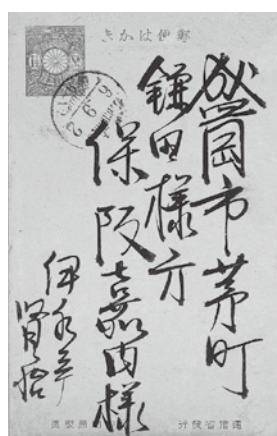


大正6年9月2日消印

「友への手紙⑬」

岩手県種山ヶ原周辺のスケッチ。
大気や動植物、蛇紋岩の露出の様子が書かれている。

―かなしめるつま・蛇紋岩ノ露出
その他英語での説明文―



資料・写真などはアザリア記念会及び保阪善三・庸夫氏より提供、掲載許可もいただいています。

※前3ページ右上に写っている屏風は身延山久遠寺にある賢治の歌碑拓本を屏風にあつらえたものです。

賢治の心友「保阪嘉内」は、 どんな人物だったの？ II



1925（大正14）年、農業への思いを断ち切れず新聞を退社し、駒井の実家に戻って再び理想の模範農村——「花園農村」をめざして活動を再開した嘉内でしたが、地元のみならず、在郷軍人としての活動にも携わらなければならませんでした。

そうした活動の一つに、青年訓練所での指導がありました。青年訓練所は、初等教育しか受けてこなかった青年を対象に、軍事教練を行ったり補修として教養を身につけさせたりするもので、ここでの青年の指導を通じて、嘉内は青年教育に生きがいを見出し

ていきます。その結果、日本青年協会へ次第に接近し、日本青年協会が全国各地に建設を進めていた農業伝習所の構想に共鳴します。そして、こうした日本青年協会の活動に従事すること、日本の未来をになう青年たちに新しい農業経営の方法を伝授しようと考えてるようになります。

やがて、1931（昭和6）年の10月、嘉内は一切の役職を辞退し、農地も処分して上京します。そして日本青年協会が開設をすすめていた武蔵野道場の主任として、新たな活動を開始します。

日本青年協会に奉職し、農業に志す青年の指導者として活動していた嘉内でしたが、それも長くは続きませんでした。就職した際に不問に付すことが約束されていたはずの盛岡高等農林学校除名処分的一件を持ち出され、昇格がはばまれたことを機に、1934（昭和9）年4月、嘉内は協会を退職します。そして、今度は発明家の山内不二門と組んで、農村副業の研究を始めます。とりわけアミノ酸醤油の醸造は試験販売を行おうと言う所まで進んでいたようです。

しかし、この時既に河本義行・宮沢賢治の二人はこの世になく、嘉内に残された時間もそう長くはありませんでした。胃癌が嘉内をおそったのです。療養の効果もあり、一度は小康状態を取り戻して農村副業の研究を再開しましたが、1936（昭和11）年11月、ついに東京での生活をあきらめ、山梨の生家に戻って病臥しなければならぬほど病状は悪化しました。

1937（昭和12）年2月8日、嘉内は40歳と4か月に満たない生涯を終えました。臨終の日集まった近親者が号泣する中で、嘉内はこう言いました。

「何を泣いているんだ。
人は皆、こうして自然に還ってゆくのだ」

土を愛し、早世論を唱えた嘉内の最後の言葉でした。

こうして、嘉内はこの世を去りましたが、枕元には、小菅健吉・河本義行そして宮沢賢治からの手紙を貼った、草色の表紙のスクラップブックがありました。離れ離れになっても4人は深い心のつながりを持ち、嘉内にとって、かけがえのない友であり続けたのです。――終――

花園農村

「花園農村」とは、嘉内が旧制甲府中学校の生徒であったころ弁論会の演説で主張していた、彼が模範とする農村の姿のことです。宮沢賢治は、心の中に存在する理想郷として「イーハトーヴ」を思い描きましたが、嘉内は理想郷として「花園農村」を中学生時代から思い描いていたのです。

そして「農学を修め、郷里に帰って村長になり、花園農村を作るんだ」という志を持って、盛岡高等農林学校に進学します。嘉内が具体的な「花園農村」のイメージを記したものの一つが『文象花崗岩』という歌稿にはさまれていたノート

の断片に書かれていたつぎの文です。
文化ホールの前庭に建てられた「花園農村の碑」にも刻まれています。

春は麦打ちせんと畑に立つて遠山のかす
みに消えゆく夢みる喜び
夏田植して帰る田の水の上に浮かむ白玉
秋は柿の梢に柿赤き頃 豊かな稲はす、風
にさらさらと波打って
冬は縄なひ 草鞋作り タベは家庭のもの
つとも飲しきうたげにあわやかに降りつ
む雪をみる
われわれをして 田園都市を作らしめよ
模範農村を 作らしめよ
そしてわが幸ある天地の神に感謝をささ
げしめよ